12. 償いの習慣に対するイエス・キリスト の姿勢

他の宗教と同様、償いに関する習慣はイスラエルのは生活に関する根付いて、彼らは生むとを改め、神のの協金、断食として、祈の儀式、亜麻布の被の習慣を執り行って、が、での多くのを、

2014/02/04

歴史学者や聖書の研究家が一致して 唱える通り、イエス・キリストの教 えは「神の御国」を中心とするもの である。また、イエス・キリストは その |神の御国 | の実現に不可欠な ものとして回心が必要と教えておら れる。「時は満ちた、神の国は近づ いた。悔い改めて福音を信ぜよし (マルコ1章、15節)。イエスが 言う償い、すなわち回心とは深い心 の回心を意味する。しかし同時に、 その心の同心に応じて生活をも同心 し、償いと言えるような実りをもた らすものでなければならない。つま り償いは、行いや振る舞いに表れて 初めて意味のある真の償いと言えよ う。実際、イエスは償いに従じたそ の生涯において、「神の御国」と償 いは切り離すことができないことを 示してくれた。イエスは断食し(マ タイ4章、2節)、快適な場所での 休憩を捧げ(マタイ8章、20 節)、祈りに夜を徹し(ルカ6章、

12節)、そして何より十字架で自らの命を捧げた。

イエスの初代の弟子達はその教えを 受け、イエスについていくというこ とは彼の通り生きるということと 悟った。この点において聖ルカは、 キリスト者はキリストが生きた通 り、日々の十字架を背負って生活す る必要があると最も強調している福 音記者である。すなわち、イエスが 弟子達に示した通りである。「だれ でも私についてきたいと思うなら、 自分を捨て、日々自分の十字架を負 うて、私に従ってきなさい」(ルカ 9章、23節)。この様に、初代キ リスト者は後も神殿で祈りを捧げ (使徒行伝3章、1節)、断食など の償いを続けた(使徒行伝13章2 - 3節)。また、断食の際はイエス の教えに従った「また断食をする時 には、偽善者がするように陰気な顔 つきをするな。彼らは断食をしてい ることを人に見せようとして、自分

の顔を見苦しくするのである。よくするのであるである。ようはそが、彼らはその報断といる。あなたがいる。あいたは、自分の頭を洗いないは、自分の頭を洗さいが入れないである。ないである。ないである。ないである。ないである。ないである。ないである。ないであるがである。ないである。ないである。ないである。ないである。ないである。ないである。ないである。

更に、キリストは十字架での死により り人類を罪から救われた。このも、 ないたでの死の値打ちががでいた。 ないたでがでいて、でいて、 でいて、でいて、でいて、 でいて、でいて、 でいて、 でい、 でいて、 でいて、 でいて、 でいて、 でいて、 でいて、 でいて、 でいて、 で (コロサイ人への手紙1章、24 節)に記されている通りであり、現 代の教会において行われている通り である。

pdf | から自動的に生成されるドキュメント https://opusdei.org/ja-jp/article/12chang-inoxi-guan-niduisuruiesukirisutonozi-shi/(2025/12/17)